書式８

助成番号	20－Ａ04

成 果 報 告 書

記入日 2024 年　04 月　19 日

フリガナ（　イシウチ　ヨシキ　） 氏　名　　石内　良季	渡航先国名・地域 ブータン王国	所属機関 ブータン王立大学シェラブツェ校

研究テーマ：現代ブータンの複層的宗教空間における自然観の位相をめぐって

研究期間　：　2022 年　4 月 ～　2023 年　3 月（　1 年　0 ヶ月）*別途+10 ヶ月

研究成果（概要）

ブータン東部農村での定着調査を実施し、現地語の習得をはじめ、滞在集落の全世帯調査と比較資料の収集を目的とする広域調査、史資料の収集・分析などを行なった。

研究成果（詳細）

着眼点および計画の修正

本研究開始時の目的は、ブータン農村における複層的宗教空間の歴史的・制度的展開に着目し、人々の持つ自然観の構築過程を明らかにすることであった。しかし現地での滞在を経ていくにつれて、私の関心は宗教と自然観を超え、かれらが生きる場としての「地域はいかなるものか」という地域研究の中心的な問いに変わっていった。この問いに答えるためには、宗教と自然観を含む、より深い地域への理解が必要であり、その点で本研究は、当初予定していた調査内容以上のものになったといえる。

研究の手法

2022 年 4 月から 2023 年 3 月、その後、別の予算を用いて 10 ヶ月の住み込み調査を実施した。調査地はタシガン県バルツァム郡であり、ブータン東部に位置している。首都ティンプーからは、国道沿いで約 500 kmあり、陸路の場合は二日がかりの車旅になる。また、同調査期間中には、バルツァム郡を中心とした周辺地域でも調査を行なった。臨地研究と聞き取り調査では、地域の住民や行政村長、郡長らに案内をお願いし、聞き取りは報告者自身がツァンラ語とチョチャンガチャ語、英語を用いて行なった。

バルツァム郡は 5 つの行政村（chiwog）と 30 の集落からなっており、報告者は D 集落に滞在していた。D 集落では、全世帯を対象として、世帯構成員の経歴、親族関係、生業、動産・不動産の所有状況、言語利用、移住歴などの全世帯調査を行なった。また、言語や生業活動などの点で D 集落とは異なる性格を持ったバルツァム郡内の別集落（T 集落）においても全世帯調査を行なった。

全世帯調査や聞き取り調査、儀礼等の予定がない時は、バルツァムの人々が営む生業活動に参加し、過去や現在の集落の変化について質問し、話を聞き、あるいは〈留学中の生活・研究でのトピックス〉で詳しく後述するが、集落やバルツァム郡内をただひたすらと歩き回っていた。このようにバルツァムで臨地研究を進めていくにしたがって、報告者にも地域の実情が徐々に見えてきた。

背景：過疎社会バルツァム

ブータン全国 205 郡のうち、全世帯数における空き家の割合が 3 割を超える郡は 5 つしかなく、バルツァム郡はその 1 つである。その現状は、報告者が滞在中にしばしば耳にした「バルツァムは消える」という人々の発言に、鮮明に感じ取れた。

調査結果①：バルツァムの歴史的世界

バルツァムの歴史はもとより、人々やモノの移動によって作られてきたともいえるくらい、常に移動のなかにあった。バルツァムという地名は「あいだの 3 つの集落（bar tsho sum）」を意味し、北はチベット、南はインドを結ぶ交易路の中間点にある地域に由来する。調査を通じて明らかになったのは、バルツァムに現在住まう人々のルーツは、19 世紀後半以降に徴税や戦争などから逃避・離散してきた人々にある。それ以前にバルツァムに住んでいたとされる人々もまた、現存する唯一のバルツァムに関する史料と東ヒマラヤ史に関する先行研究を照らし合わせると、バルツァムだけでなく東ブータンの人口が極端に減少した時期があったことが分かっている。このようにバルツァムにおける人口は、歴史のなかで増減してきた。

人の移動という点でバルツァムに特徴的なのは宗教的職能者である。初代バルツァム・ラマ（高僧）であったペマ・ワンチェン（Pema Wangchen）は、幼少期をバルツァムで過ごした後、タシガンの僧院に入り、チベットへの放浪の旅を終えた後、バルツァムへと戻ってきた。卓越したタントラ行者であった彼は、後にブータン王室に仕えることになり、王室や首都との関係を築いた彼を通じて、バルツァム出身の多くの宗教的職能者（およびその家族）が首都へと移住していった。首都での聞き取り調査から、かれらは首都に出た後、宗教的職能者の仕事を傍に置き、新たにタクシー業や商店経営に手を出した人がいたことも分かった。このようにバルツァムでは、人々の移動性（mobility）だけでなく、宗教的職能者から世俗の者へと簡単に移り変わることができる社会的地位の流動性（fluidity）もまた特徴的であるといえよう。

調査結果②：バルツァムの生活史

前述したバルツァムにおける移動の一つに交易がある。バルツァムの人々の生活史を集めていくうちに、とりわけ 20 世紀後半の生業における交易の重要性が明らかになってきた。男性は南部国境を超えてインド側に行き、生糸や布などを購入する。それらは女性らによって染色と機織りが集落でなされ、出来あがった織物は男性によって再度、北東部国境を超えてインド側の街であるタワン（Tawang）やルムラ（Lumla）といった地域に運ばれた。交易品の項目は国内・周辺地域の開発や情勢によって変わり、また、交易自体も 20 世紀の終わりと共に衰退の道を進んだ。交易を通して一代で富を築き上げたバルツァム出身者は、その資産を元手に首都や街で企業し、今やブータンで随一を争う大企業にまで発展している。あるバルツァム在住者は、バルツァムの発展を「宗教と商売（choe dang tshong）」によるものだと指摘したが、まさにこれらこそがバルツァムという地域を形成した要素であった。

交易で用いられていたトマ（腰掛け兼荷物置き）

調査結果③：バルツァムの暮らしと生業

段々畑で雨のなか田植えをする報告者

一般的なバルツァムの農民にとって、宗教と商業的活動は農閑期に集中して実践されるものである。農繁期には、東ブータンの主要作物であるトウモロコシにはじまり、ジャガイモや水稲がバルツァムでは栽培されてきた。しかし上述したように、過疎社会バルツァムの抱える問題には、農業労働者の不足や耕作放棄地の増加、それに伴う獣害の拡大と食料自給率の低下などが挙げられる。主要作物の栽培時における労働力は、集落内外からの労働交換を行なうことが現在では一般的である。

労働交換の制度は以前から存在するものの、聞き取りのなかで明らかになったのは、労働交換の割合が、過疎が進んだ現在の方が多くなったことである。20 世紀後半に進められた土地改革と開発以前は、集落内でも経済的格差が著しくあり、現金獲得のための賃金労働を富裕世帯の下で行なうことがあった。しかし現金獲得の手段が多様化し、バルツァム在住者の言葉を借りれば「みんな平等（doro）になった」現在は、現金ではなく労働力が必要とされている。

調査結果④：バルツァムの宗教

ツェチュで提供する食事の
野菜を切る老人たち

過疎の実態は人口現象・社会現象に限らず、そのなかに巻き込まれた人々の実存に関わる問題として、バルツァムでは現出していた。特に宗教的行事への参加においてである。

バルツァムでは集落ごとにツェチュ（tshechu）と呼ばれる祭りが、主に農閑期に毎年行われていた。ツェチュでは、実施する集落の世帯構成員らが、食材や宗教的職能者の手配、予算管理等を行なう。ツェチュの開催側に立つ主な人々の動機は「功徳を積むこと」であるが、過疎は人々の積徳行の実践にも影響を及ぼしていることが分かった。ツェチュには開催日に、周辺集落の人々が手土産を持って訪れてくる。開催者側はかれらに食事や酒、供物を分配する（喜捨）ことで、功徳を得られるのだが、過疎の現実もあり、以前に比べて訪問者の数は減少した。それは単純に、開催者側の功徳を積む機会（あるいは功徳の総量）の減少を意味している。さらに、ツェチュを開催するにあたっての酒や調味料類、スナック菓子の購入費、宗教的職能者への謝礼は年々値上がり傾向にあり、集落外在住者らの送金によって賄われている部分も少なくはない。与え手の側にも、集落内・外在住者によって積徳行の不均衡があるということが明らかになった。

まとめ

過疎という現象を扱うと、どうしても悲観的になってしまう。全世帯調査をしていた時、あまりにも子ども・若者の数が少なくて、この集落は 100 年後にはもう消えていてもおかしくないと肌身に感じた。しかし現地での滞在を通して見えてきたのは、消えていくからこそ見えてくる全体（地域像）であった。これこそ、私がこれから取り組む博士論文の一つの軸になるのではないか。そう思える調査であった。

留学中の生活・研究でのトピックス

私は地域研究者を志ざしながら、「地域研究とは何か」という答えに、今一つ自信を持って答えられてこなかった（これからも）。それは私自身、地域研究はディシプリンではないが、既存の学問分野と対等のものであると認識し、地域研究には地域研究なりの問いと方法論がある、と考え続けているからでもある。

地域研究の問いは「〇〇（地域）とは何か」であると考える。しかし、この問いは「誰にとって」なのかが重要である。私が考えるに、この問いには「私にとって」と「その地域に住まう人々にとって」の 2 つの捉え方があり、前者は自分学としての地域研究ともいえよう。私にとって自分学としての地域研究は、学部一年時に出会って以来、その魅力に飲み込まれ、人生が変えられてしまったブータンとは何なのかを自問し続けるものである。そして、今回の調査で一貫して考え続けていたのは、「バルツァムに住まう人たちにとってバルツァムとは何なのか」という後者の問いであった。

地域研究に方法論があるのなら、その一つは「地域に住まう人々が、地域の過去・現在・未来のことを把握する手法」であり、地域研究者はその手法を身に付けることが重要であると私は考える。もちろん地域によって手法は異なるわけであり、バルツァムの人々が実践していたのはツァンラ語で「コルベ（kor bay)」、チョチャンガチャ語で「ヤンマ（yan ma)」と呼ばれるものであった。これは意訳すると「特に目的はないが、何か偶発的な出会いを期待して、集落のなかをただ歩く」という意味になる。道行く人に「どこに行くのか？（日本でいう挨拶の位置付け)」と尋ねると、「コルベだ」と答えられるように、私もまた、バルツァム滞在中はよくコルベをした。コルベは日常的な人々の実践であった。

コルベを通して出会った人々もいれば、コルベの最中に見つけた小径、鮮やかな水色が特徴のロクショウヒタキ、茂みに隠れた仏塔との出会いもあった。そうした新たな出会いの度に、小径がロクショウヒタキが仏塔が、地域を語り出してくるように感じた。バルツァムでの地域研究の方法を教えてくれたバルツァムの人々にはじまり、動物や道が地域を語り始めた時、はたして「地域研究者とは誰なのか」、とも思った。コルベは地域研究者としての自己を揺らがせた。

今後の社会貢献

現地滞在中に習得した言語（ツァンラ語とチョチャンガチャ語）は、表記体系がないだけでなく、これらを学ぼうとする人々が容易に手に取れる学習本が存在しない。ブータンの国際協力の場で働く方々や友人、先生方からの要望もあり、初学者向けの言語学習本の執筆に少しずつではあるが取り組んでいる。

研究においては、長期調査で得た成果をもとに博士論文を執筆し、書籍として出版することが一つの社会還元であろう。特に、調査地の地域史に関する部分は、ブータンの人々が読めるよう英語・ゾンカ語での執筆を念頭においており、その際には、調査期間中にお世話になった調査地出身の研究者との共同執筆、現地出版を考えている。

また、京都大学が現地の大学と連携し行なっている地域づくりプロジェクトの一環として、調査地での民俗資料館の整備がある。今回の滞在期間中に得られた地域の歴史・口承文芸は、民俗資料館の展示として残し、地域の学校教育や観光資源化に貢献したい。